Vol.24

Architect at Home

坂本一成 | House SA [1999]

Kazunari Sakamoto

中村好文＝イラストも
Yoshifumi Nakamura

膨大な小物のコレクションに圧倒され、思わずその飾り棚のひとつを撮影させてもらう。背後で坂本さんが「ニヤリ」

阿部勤さんの自邸「中心のある家」をスタッフ数名と一緒に訪れ、阿部さんの手料理をご馳走になったのは、6年前。この「Architect at Home」の連載第1回目の取材でした。そのとき、思わず「文字どおり、美味しい取材だね！」とそばにいたスタッフに呟いたことを、昨日のことのようにはっきり憶えています。その連載も今回が最終回。快く見学させてくれた建築家の皆さん、寄り道の多い訪問記（ルポルタージュ）に、毎回（あるいは、ときどき）付き合ってくれた読者の皆さん、長い間、ありがとうございました。

振り返ると、国内外の建築家の自邸24軒を訪ね歩いたことになりますが、6年間も続けることができたのは、この連載が建築家の自邸をフラリと訪ねて行って見学させてもらい、住み手の建築家と雑談する気軽な「取材スタイル」だったからだと思います。

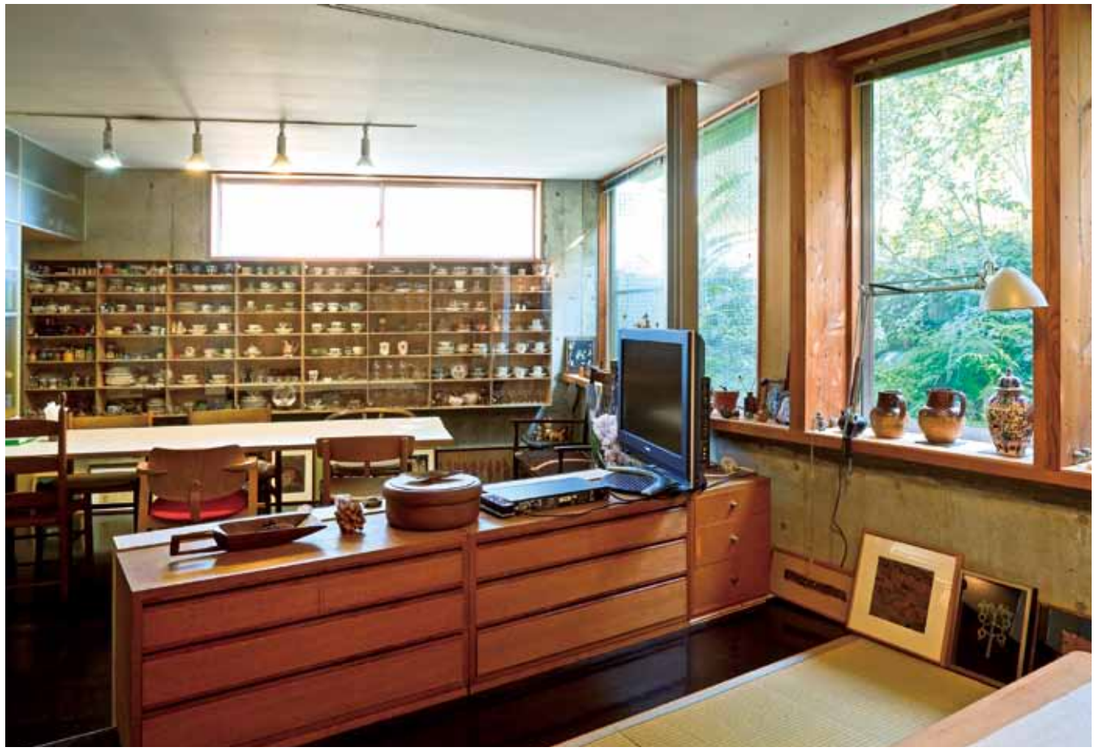
ところが、今回、坂本一成さんの「House SA」を見学させてもらうにあたって、この住宅だけは、「そういうわけにはいかないなぁ」と思い、見学前にこの住宅の掲載誌を見直したり、坂本さんの著書『日常の詩学』を読み返したり、私としては珍しく「予習」しました。ここで、なぜ「そういうわけにいかない」と思ったのか？ このあたりの心理が我ながら上手く説明できませんが、設計に3年半もかかったという坂本さんの自邸を予備知識なしでフラリと訪ねたのでは「歯が立たない」と思ったのは確かです。緻密な思考を積み重ね、独特の研ぎ澄まされた感性で裏打ちされた作品の意図するところ、意味するところ、つまり坂本さんの住宅作品の真価が、私には充分理解できていたとは言えませんから、遅ればせながらでも泥縄式の勉強が必要だったのです。

「House SA」は発表以来、さまざまなところで取り上げられています。坂本さん自身の作品解説がありますし、評論あり、インタビューあり、座談会ありで、言ってみれば語り尽くされた感があります。中でも、この『INAX REPORT』186号 の「続々モダニズムの軌跡」の古谷誠章さんのインタビューは秀逸です。読み直しているうちに、もう、私なんかの出る幕はないという気がしてきたのですが、私も住宅建築家のはしくれですから、これほどまで評判の高い住宅を見学できるチャンスを、むざむざ逃すわけにはいかないと思い直し、『INAX REPORT』はひとまず脇において、期待に胸を膨らませて出掛けたのでした。

–

この連載の取材はいつも晴天に恵まれます。見学当日も、穏やかな冬晴れの中、最寄りの駅からカメラマンの車でくねくね曲がる坂道を走って「House SA」に向かいました。坂を登りきり、少し降りかけたとき、左斜め正面にソーラーパネルを載せた屋根とその向こうに、暖かな日射しを一杯に浴び、ひなたぼっこをしているような雑木林の山並が目に飛び込んできました。車を降り、インターフォンのボタンを押

［建築概要］名称：House SA｜所在地：神奈川県川崎市｜家族構成：2人｜敷地面積：178.61m²｜建築面積：82.00m²｜延床面積：127.19m²｜規模：地下1階、地上2階｜構造：木造＋RC造｜設計：坂本一成研究室



坂道（畦道？）を降りきったところがダイニングスペース。テーブルのまわりに椅子のコレクション、食卓背後の飾り棚にコーヒーカップのコレクション、窓台には壺のコレクション

坂道途中の角地に建つ「House SA」。「あたりまえの住宅を、あたりまえでなく作る」とこうなります

坂の下から見上げると、特徴的なトンガリ屋根が見えます

して待つ間、坂道がそのままカーポートに取り込まれているさまを眺めているとき、ふと、カーポートを玄関前のポーチと兼用するのが「坂本好み」なのかな？ という想いが、脳裏をよぎりました。言うまでもなく、「水無瀬の町家」のプランからの連想です。そう考えると、敷地の外形をなぞるように平面形状が決められているところも「水無瀬の町家」と似ているように思えてきます。幾何学や自分自身の美意識に固執せず、敷地形状や周辺環境など外的要因も積極的に建築に取り入れていこう、そして、そのために生まれる「曖昧さ」を容認しよう、いや、いっそ楽しもうではないか、という意図がはっきり感じられました。と、同時に、坂本さんがどこかの座談会の中で「ピュアだと面白くないんです」と語っていたことも私は思い出していました。戸口でにこやかな笑顔の坂本さんと奥様に迎えていただき、いよいよ室内です。玄関は下階と上階の中間にあり、一瞬、自分が岐路に立っているような気分になります。まずは、坂道のようなゆるやかな傾斜階段を降りることにします。外の明るさに慣れていた目には、玄関がちょっとほの暗く感じられましたが、ダイニングスペースのある下階に降りて行くに従って、次第に明るさが増していきました。坂道と呼応するように変化する明暗のグラデーションも、この住宅の隠れたテーマなのかもしれません。そして、坂道を降りきったところが大きなダイニングテーブルのあるスペース。ゆるやかに流れて来た水が静かな淀みを作るように、人の気持ちはこのダイニングテーブル周辺に流れ込んで、腰を落ち着けることになります。食卓背後のガラスの飾り棚の中には由緒ありげなコーヒーカップとティーカップのコレクションがズラーリと並んでいましたが、いかんせん、私には猫に小判。そのうちのひとつはリチャード・ジノリの稀少な時代物とのことでした。

居心地の良いダイニングテーブルの前を離れ、今度はさっき降りて来た道を引き返すかたちで坂道を登って行きました。玄関前で折り返し、さらに登って行くと、テラスに面した居間的な場所に辿り着きます。テラスの向こうには、次第に低くなっていく家並みと雑木に覆われた山の風景を眺望できる天井の高い開放的なスペースです。ここでひと息つき、もう一度折り返してさらに上へ上へと登って行き、突き当たりでもう一度折り返すと、畳敷の寝室コーナーに到達し、ここが坂の頂上です。坂本さんは「螺旋的な構成で、連続的な拡がりを求めた」そうですが、その狙いは見事に成功しています。また、一番上から眺めおろすと「棚田のようなグラデーションだけを意図していた」という坂本さんの言葉が、ストンと腑に落ちます。そう、この住宅は、棚田とその脇に寄り添う畦道でできていると考えると、スッキリ頭に入るのです。

–

さて、畦道という言葉を思いついたので、ここからは段々状の階段をそう呼ばせてもらいます。その畦道を登り降りするとき、誰もが目を奪われずにいられないのが、脇の棚に飾られている陶磁器、雑貨、玩具、民芸品などなど…膨大な量の小物のコレクションです。大きさも、色も、形も、趣きも、背後にある物語もそれぞれ異なる古今東西から集められた小物たちが、つかず離れずの絶妙な距離感を保ちつつ飾られています。そして、小物たちはガラス張りの飾り棚の中だけにとどまらず（飽きたらず？）、棚という棚、台という台、およそ平らな面ならどこであろうと進出し、したり顔で鎮座しているのです。トーネットのロッキングチェアの上には、ぬいぐるみの人形たちが仲良く肩を寄せ合っていたりしました。こうした小物を愛でる趣味は、おそらく奥様に違いないと推察しましたが、念のため坂本さんに「小物を集めて飾るのは、どちらの趣味ですか？」と質問してみますと、坂本さんは「さぁ、どっちだと思う？」と言い、謎めいた顔つきでニヤリと笑っただけ。真相は分からずじまいでした。ここで言い添えておかなければならないのは、坂本家のコレクションが小物だけではないことです。家中に世界の名作椅子やアンティックの椅子が所狭しとばらまかれているだけでなく、アフリカのベッドも、朝鮮の膳も、桐の箪笥もあります。壁には色鮮やかな民芸品の衣装や古時計なども飾ってありました。そうした膨大なコレクションに囲まれる暮らしから私が連想したのは、チャールズ・イームズと猪熊弦一郎の住まいです。このふたりの住まいも世界中の民芸品や玩具のたぐいのミュージアムのようでした。イームズ氏と猪熊さんのコレクションは、どちらがどちらのモノと言えないほど似通っていましたが、一番よく似ていたのは、2人ともそのコレクションをはっきりと自分の仕事の「教材にしていた」ことです。2人の作品には明らかに身近なコレクションから直接的に影響を受けたと思われるものがいくつもありました。では、坂本さんは、どうでしょう？ また「ニヤリ」で終わってしまうかもしれないと思いつつ、私はダメモトでそのことを訊いてみました。坂本さんは、今度は、きっぱりとした言葉で「ぼくはモノから直接学ぶことはないし、インスピレーションを受けることもありません」と答えられました。私にはこの言葉が、坂本さんが建築に向かい合うときの姿勢、あるいは信念の表明のように聞こえました。坂本さんにとって、建築はあくまでも理性あるいは思考の産物だということなのでしょう。

–

見学から帰ってから、しばらくは「House SA」のことが頭から離れませんでした。なにか大事なものを忘れてきたような気がして落ち着かなかったのです。そして、あるとき、突然その忘れ物の正体が分かりました。見学当日、私は車で戸口まで乗り付けたのですが、「それでは、あの住宅を本当に見学したことにならない」ことに気づいたのです。駅から曲がりくねった坂道をゆっくり散歩しながら辿り着けば、足取りと意識はごく自然に建物内部の畦道に繋がるはずでした。そして、見学から1ヶ月後、私はもう一度、「House SA」の外観を眺めるために、今度は駅から歩いて行きました。坂の下から建物を見上げると矩形の外壁の上部に曲面屋根のトンガリが覗いていました。室内側からその部分を見上げたとき、ねじり上がるシナベニヤの天井が「茶巾絞り」の内側のようだと思ったのですが、外から見るとその部分はキューピーの髪の毛のようにチャーミングでした。そして、思ったとおり、外部の坂道と建物内部の畦道は頭の中でちゃんと繋がりました。

さて、二度目の見学でとくに印象に残ったのは建物のプロポーションとスケール感です。ちょっと小振りに感じられる独特のスケールに坂本さんらしさがよく現れていると思いました。見学した折、坂本さんが静かな口調で語ってくれた「あたりまえの住宅を、あたりまえでなく作りたい。それにはスケールを小さくしておくのがいい…」という言葉が、耳元で聞こえたような気がしました。

玄関ホールは坂道の中間にあり、一瞬、「どちらに行くべきか」迷いました

登りきった一番上が畳敷の寝室コーナー。私は、ねじり上がるシナベニヤの天井から「茶巾絞り」を連想しました

寝室コーナーから見おろす「棚田」と「畦道」

外観からは想像できない大きな空間が拡がり、一瞬、雑木林の山並に向かって坂道を降りて行くような錯覚を覚えます

なかむら・よしふみ——建築家／1948年生まれ。
武蔵野美術大学建築学科卒業。1972–74年、宍道設計事務所。1976–80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
主な作品：三谷さんの家［1986］、REI HUT［2001］、伊丹十三記念館［2007］など。
主な著書：『住宅巡礼』［新潮社／2000］、『住宅読本』［新潮社／2004］、『意中の建築 上・下』［新潮社／2005］、『Come on-a my house』［ラトルズ／2009］、『普通の住宅、普通の別荘』［TOTO出版／2010］など。